



Data

監督: 木村ひさし
原作: 今村昌弘『屍人荘の殺人』(創元推理文庫)
出演: 神木隆之介/浜辺美波/葉山奨之/矢本悠馬/佐久間由依/山田杏奈/大関れいか/福本莉子/塚地武雅/ふせえり/池田鉄洋/古川雄輝/柄本時生/中村倫也

■■■ショートコメント■■■

◆本作の原作は、国内主要ミステリー賞4冠を達成した今村昌弘のデビュー作『屍人荘の殺人』。そして、「ようこそ、奇想天外の密室ミステリーへ。」「この冬、予測不能な【前代未聞】のミステリー・エンターテインメントが開幕する!」との宣伝文句が躍っている。

そうになると、近時の邦画のバカバカしさに嫌気がさしている私だが、一応期待感を持って試写室へ。

◆本作の舞台は、紫湛荘(しじんそう)という名の山奥に佇むペンション。主人公は、神紅大学のミステリー愛好会に所属する葉村譲(神木隆之介)と明智恭介(中村倫也)で、自称ホームズとワトソン。それに絡むのが、謎の美人女子大生探偵・剣崎比留子(浜辺美波)だが、さて、この3人の推理力は?

本作のタイトルになっている「屍人荘」(しじんそう)は何とも難しい読み方だが、舞台となる紫湛荘での殺人事件を考えると、そのネーミングはピッタリ。しかし、肝心の推理モノとしての面白さは・・・?

◆日本国中に「カメ止め」旋風を巻き起こした上田慎一郎監督の『カメラを止めるな!』(17年)は、ゾンビ映画の撮影風景から始まっていた(『シネマ42』17頁)が、ホームズとワトソンが登場する本格ミステリー小説ではゾンビは全く関係がないはずだ。

本作導入部では、夏合宿のために紫湛荘に集まった音楽フェス研究会の面々と、剣崎、葉村、明智との「自己紹介」の中で、その後の波乱の物語の予想がされていく。しかし、まさかそこでゾンビが登場してくるとは・・・。

◆去る9月29日に観た『ホテルムンバイ』(18年)の「ホテル・ムンバイ」は、インドのムンバイにある五つ星ホテルだからその豪華さが際立っていたが、本作の舞台となる紫湛荘もかなり豪華。1階ロビーと2階のラウンジも立派だし、東エリアと南エリアに分れている客室もかなり広い。

しかして、本作では紫湛荘の中で起きる密室殺人事件がさまざまなトリックの下で展開されていくので、それに注目！もともと、本作はその合間合間に紫湛荘へのゾンビの襲撃があるので、その度に私たち観客の推理も途絶えてしまうから、こりゃ如何なもの・・・。

◆中井貴一主演の『記憶にございません！』(19年)も、西田敏行・西島秀俊コンビの『任侠学園』(19年)も、コメディながらそれなりの社会問題提起があったから、私でもそれなりに楽しめた。また、それぞれのキャラクターにもそれなりの好感を持つことができた。

しかし、本作では最初から3人の主人公たちのキャラがあまりにバカバカしすぎるうえ、ギャグ受けを狙った演出がミエミエだから、いい加減うんざり。その上、シャーロック・ホームズや金田一耕助並みの推理力なら恐れ入るが、本作ラストにみる剣崎の推理力では、いささか消化不良に・・・。

2019(令和元)年10月11日記